

## 「ケンミジンコに学ぶ(1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

5年生の子どもたちと、校庭の池(ライオン池という壁泉の下にある小さな池)の水から、プランクトンを探していた時のこと。ある子どもが叫んだ。



「先生、ダニっぽいキモいの、もらへんを歩ってる！」典型的な「現代子ども語」である。標準語に訳すと、「先生、ダニのような気持ち悪いものが、藻の近くを歩いています。」となる。さっそくその研究所(班)の顕微鏡をのぞくと、なるほど、確かにダニのような生き物が、アオミドロの縁をゆっくりと移動している。



「子どもが見つけた謎の生物」×100 透過光  
アオミドロらへんを、ノソノソ移動していた。

確かにアオミドロの縁を、足を動かしながらカニのように歩いているように見える。私は、何度もプランクトンの観察をしているが、こんな奇っ怪な生き物は見た記憶がない。

さっそく「日本産淡水プランクトン図鑑(北隆館)」を開いたが、無駄だった。この図鑑は基本的に専門家用で、図版もモノクロの線描である。そうこうしているうちに、また子どもが叫んだ。

「先生、ダニっぽヤツが、お腹を向けた！」



最初に見ていた時は、横を向いていたのだ。この向きなら同定に一步近づく。しかしこれでもわからない。ワムシでもラップムシでもない。ミジンコともちがう。

こういう時に一番役立つ感覚は「勘」である。腕の形状や単眼の様子から、これはケンミジンコの幼生ではないかと思った。以前読んだプランクトンの本にも、甲殻類のケンミジンコは、成長過程で変態をするという記述があった。もしそうだとすると、これは淡水性甲殻類プランクトンの幼生・・・つまりノープリウス(Nauplius)ということになる。そのことを証明するには、ケンミジンコの成体(成長した個体)を探すしかない。さっそくその発見を、全研究所(班)に「依頼」することにした。(つづく)